藤屋 侃士
(下松市幸ケ丘)

江戸文化に魅了される
～東京旅・美術館巡り②～

今回は今年二回目であるが、私にとっては今年最初に書く「巡礼の道」である。

原稿は一週間前に届けるので、その前に一週間で書きあげる。正月休刊日もあったが、今年一回目の原稿は昨年末に書いたものである。

そして新しい年を迎えただけでなく、新年早々に次のシリーズを書くため、五日間、台湾にでかけた。だから昨年末に書いた今年最初の原稿は随分以前に書いたような気持ちになり、ペンを取ってもその続きが書き出せなかった。

昨秋訪れた美術館などの資料を何度も読み返し、気持ちを昨秋に戻してやっとペンを取る。改めて人間とは環境の変化に大きく影響されるものだと思う。

さて、東京・上野公園には動物園をはじめ、美術館、博物館などが集中している。今年は上野動物園に生まれたパンダのシャンシャンが人気を集めているので、一段と訪れる人も多いだろう。

宿を動物園横の森鴎外ゆかりのホテル、鴎外荘に移して美術館巡りをスタートさせる。

最初に訪れたのは前回紹介した東京都美術館のゴッホ展。そして国立西洋美術館に向かう。この美術館はスイス生まれの建築家ル・コルビュジェが設計したものだが、二〇一六年に彼の一連の建築物が世界遺産に登録され、国立西洋美術館もその一つに含まれている。

今までに何度も訪れたことがあるが、「世界遺産」と言われると、何となく立派な建物に見える。美術にしろ、建築にしろ、その程度の認識しか私にはない。

ここでは、都美術館のゴッホ展の企画に連動したかのように「北斎とジャポニズム展」が開催中であった。

「ジャポニズム」とは、十九世紀後半に日本文化からヒントを得て、西洋の美術、建築、文学などに携わる人々が作り上げた新しい創作活動のことを言うらしい。

ゴッホが日本の浮世絵などに大きな影響を受けたことについては前回触れた。ゴッホに限らず西洋の当時の画家の多くが葛飾北斎の作品に魅了された。ジャポニズム展では北斎の作品や影響を受けたとされる作品約二百二十点が展示されていた。

そこには素人の私でも知っている、モネ、ルノワール、セザンヌ、ゴーギャン、ドガ、ロートレックなどの作品があった。

太平洋戦争で欧米に負けた時代に育った私にとっては、西欧にあこがれ、自分の国を卑下する傾向があるが、美術面で、西洋の巨匠たちが日本の文化に魅了されていたということは恥ずかしながら全く知らなかった。それだけに、何か自分まで褒められているような気分にさせられる。

ゴッホと北斎の二人を介して江戸時代の日本文化の素晴らしさに気づかせてくれたのは、作品と同時に、掲載した「うえの」という月刊誌であった。素人の私にもわかるように、上野に集中する美術館、博物館の催し物の解説が実に有り難かった。

ふと、大英博物館を訪れた時のことを思い出した。入館は無料。大勢の子供たちが先生に連れられて来ていた。

小さいころから、文化財や美術作品の本物に触れさせ、文化のすそ野を広げさせる努力をしているように思えた。

上野もまさにそのような素晴らしい場所である。

上野公園の催事を紹介する月刊誌